人声天語 連載200

和田誠さんとお話したかったこと

坪内祐三

中野 翠＝イラストレーション

「死者の当り年」という言い方は少々不謹慎だが二〇一九年はまさに「死者の当り年」だった。

橋本治、加藤典洋、岡留安則という団塊の人がまず立て続けに亡くなった。

たしか以前にも書いたと思うが、死亡年齢が下って来ている。

私の父や阿川弘之、安岡章太郎ら大正九（一九二〇）、十年生まれは太平洋戦争で一番数多く亡くなっているが、生きて帰って来た人の多くは長生きだ。

今名前を挙げた三人は皆九十歳以上まで生きた。

だから超高齢化社会の登場と言われた。

ところがその下、昭和ヒトケタ世代になると八十五歳の壁があった。

昭和六年生まれの山口昌男さんも常盤新平さんもその壁を破れなかった。

その次、昭和フタケタ世代になると壁は八十歳になった。

例えば赤瀬川原平さんで、先日亡くなられた池内紀さんも名前に「紀」が入っていて、つまり紀元二千六百年の年（一九四〇年）に生まれたから七十九歳だった。同じ年に生まれた新宿の文壇バー「風花」の紀久子さん、今年（二〇二〇年）五月に開かれる四十周年パーティーで元気なお姿を拝見したい。

早死と言えば、大相撲関係者（元力士）たちだ。

彼らはもともと早死で、六十歳の停年まで生きた人たちは少なかった。

ところがここでも高齢化が進み、ある時から停年を六十五歳まで伸ばした。

それでも停年まで（いや停年過ぎても）長生きする人が多かった。

流れが変わったのは理事長だった北の湖親方（昭和二十八年生まれ）と、それに続いてウルフこと九重親方（昭和三十年生まれ）が亡くなったことだろう。

そして二〇一九年に入って井筒親方（元逆鉾）と東関親方（元潮丸――本名は佐野元泰）が相い次いで亡くなった。

井筒は五十代、東関に至ってはまだ四十代初めだった。それから心配なのは体調をくずして廃業してしまった阿武松親方（元益荒雄）だ。しかし阿武松といい貴ノ岩といい貴ノ富士といい貴乃花のまわりの人間はどうして角界から消えて行くのだろう（井筒部屋がなくなった時井筒親方の弟である錣山親方・寺尾が鶴竜をはじめとする井筒部屋の力士たちを引き取れなかったのは「貴乃花騒動」の時に貴乃花を支持して一門が変わってしまったからだ）。

相撲の話を続ければNHKの解説者をつとめる昭和十七・一九四二年生まれの北の富士勝昭はバケモノのように若く元気だ。

その北の富士より五歳年上の元大関豊山（日本相撲協会八代目理事長）の姿を数年前、初場所が開かれている時、両国駅近くで見かけた。

国技館に入って行くのかなと思って見ていたら、浮世絵の展覧会が開かれている江戸東京博物館に入っていった。背すじもピンとして歩き方もとても若々しかった。

二〇一九年に亡くなった人に話を戻すと、野球界では金田正一。八十六歳という高齢だが、現役時代から健康管理はしっかりしていたから百歳ぐらいまで生きるかと思っていた。

助っ人外人選手といえば、マニュエルやバース、オマリー、クロマティー、あるいはラミレスを第一に思い浮かべる人もいるだろうが、私の場合は阪神タイガースにいたジーン・バッキーだ（次点は阪急ブレーブスのスペンサー）。

前回の東京オリンピックの頃に私はプロ野球に目ざめたが、それはちょうどバッキーが大活躍し始めた時期だ。

だが実は彼の活躍期間は短かった。

一九六八年九月の巨人戦で、王貞治に投げたデッドボール（ビーンボール）まがいの球によって大乱闘が始まり（それを私はテレビ中継で見ていて翌日同級生たちと話題にした）、巨人軍の荒川博コーチを殴って親指を骨折、翌年引退に追い込まれる。そのバッキーが九月十四日八十二歳で亡くなった。

しかし一番残念だったのは和田誠の死だ。

私は和田誠のとても古い読者だ。

小学校一年生の時から、ということはもう五十五年になる。

当時あかね書房から『けんはへっちゃら』という絵本が出ていて、文章が谷川俊太郎で、絵を描いていたのが和田誠だった。

『鉄腕アトム』の主題歌の作詞者として谷川俊太郎のことを知っていて、その興味からこの絵本を手にしたのだろう。

すぐに和田誠の世界に引き込まれた。

たぶん百回ぐらい目を通したと思う。

同じ経験をもつ同世代人はいるはずなのに、この絵本に触れている人はいなかった。

和田さんにお目にかかって直接その話をしたかったのに、それはかなわなかった。残念だ。

文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
令和二年二月一日発行（毎月一回一日発行）
第九十八巻第二号（一月十日発売）

「消費税ゼロ」で日本は甦る

政策論文 山本太郎

総力特集 2020年の「羅針盤」／わが友 中曽根康弘 渡邉恒雄

新春特別号